

教員免許状更新講習 2015年3月21日(土)～23日(月)  
「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」レポート

北野 諒

アート・コミュニケーション研究センター 講師・研究員



京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センターでは、2009年度より、学びの場面における「コミュニケーション」をテーマとして、教員免許状更新講習を開催している。2014年度も夏期に続き、3/21・23においても「コミュニケーション・スキルアップの三日間！」と題して講習を開講。毎回、口コミでのご参加を多数頂き、今回も年度末にもかかわらず、50名近くの参加者を迎えての開催となった。ここでは、毎日の小論述において先生方が記述して下さったコメントやご意見をもとに、3日間を振り返ってみたい。括弧でくくられた太字の箇所は、すべて先生方の言葉からの引用となっている。

### 1日目

「コミュニケーションと言うと、『話すこと』だと思われがちですが、今回の講座では、皆さんに口だけでなく、目と耳もフル回転で使って頂きます」という福のイントロダクションから講習はスタート。これを受け、まずは先生方にペアになっていただき、鏡で天井をみながら歩く / 鏡の中で正しく読めるように自分の名前を書く、という2つのワークショップを実施した。「目にうつるとおりに体が動かないという体験」「自分の思い通りに文字を書くことができないもどかしさ」を覚えながらも、「パートナーの人がそばにいて、声をかけてくれることで安心して進むことができ」、「鏡1枚を使っただけなのに、まるでリアルに2人で何かを助け合ったような感覚」を得ていただけたようだ。

続く「ブラインド・トーク」は、「目隠しをした相手に言葉だけで作品について伝える」というワークショップ。「目で見えていることを、相手に伝える難しさ」を体感する、ゲーム的でありながらも、ハードな内容であった。「たとえば、ワイングラスといっても、大きさ・色・形状など、具体的な内容は千差万別」であるために、「自分のなかの当たり前」だけでコミュニケーションしようとする、行き違いが生じてしまう。このズレをほぐしていくためには、「自分が何を『みているのか』まず意識して、言葉にしてみる。そして相手とのやりとりを通して何が『みえていなかったのか』も発見する」というプロセス、つまり一方的に伝えるのではなく、お互いが対等に聴き合う関係性が重要であった。

休憩を挟んで、午後からはいよいよ4人1組のグループワークに入り、「本気でマンガを読んでみる」をテーマに「マンガ読解」ワークショップが行われた。あるマンガ作品をグループで徹底的に読み合わせ、「自分の持っている価値観ではかたよった理解の仕方しかできなかったのが、4人で意見交流をすることで新たな発見」が生まれることを体験していただけたようだ。これは児童生徒を「みる」場面でも同様であり、「ひとりの生徒について自分ひとりで考えるのではなく、まわりの教員と交流し、様々な視点からその生徒をみる」ことが必要なのではないだろうか。

2時間をかけたマンガ読解(!)の後は、講習の内容を振り返り、残り2日間をどう学んでいくかを考えるグループ・ディスカッションを実施。さらに小論述を最後に行い、1日目のまとめとした。ある先生は、「みる」ことについての気づきを次のように記述してくださった。「はじめに『みる』がなぜひらがなのか、気になっていました。1日のワークを終え、『みる』には、視覚的に見る以外にも、雰囲気を見る・違いを見る・相手の考えをみる・状況をみる……など様々な『みる』が存在し、ゆえにひらがなのだと気づきました。自分の先入観だけで『みない』こと、相手がどのように『みる』のか考えながら『みて』いくこと、そしてその後のコミュニケーションにより、もっと『みる』意味を深めていくことができるのではないのでしょうか」。



## 2日目

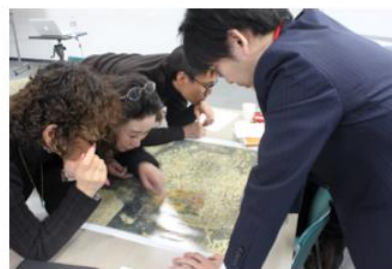
2日目の幕開けは、福によるレクチャー「みることから始まる作品そして他者とのコミュニケーション」。主に美術や鑑賞教育を題材にしながらも、そこで生まれているコミュニケーションは、あらゆる教科や学びの場面と共通するものであることを示していた。「鑑賞のプロセスでは、知的探究心が駆り立てられ、観察力が身につく、他者を理解したいという気持ちも高まり、それを言葉にするための言語能力も求められる」というわけだ。

お昼休みの後は、伊達による「聴く・応答する」ワークショップ。3人1組で会話をを行い、発話の度に、話者の言わんとすることを聴き手が確認していくという内容なのだが、これが中々難しい。「正しくききとろうとして、相手の言葉をひたすらくり返して確認」とすると、どうにも「不自然で居心地の悪い会話」に

になってしまう。この「尋問」のようなコミュニケーションに陥らないためには「相手の言うことを受けとめて」「自分の言葉で言い換えてみて相手を理解しよう」とするプロセスが必要になってくる。「相手に対して思いやりの気持ちが……少し足りていなかったのかもしれない」とのコメントもあるように、普段の学校・教室でのコミュニケーションを振り返る機会としても捉えて下さったようだ。

続く「対話型鑑賞を体験しよう」では、2つのグループにわかれ、それぞれ1時間ほどかけて1作品を鑑賞。福のレクチャーと聴くワークショップの内容を、総合するような体験となっていた。「意見を聞きながら、どんどん自分の考えも刺激を受けて移り変わっていく感じ」を楽しむ作品鑑賞のプロセスは、つまり作品について語っている「人」をも同時に鑑賞するプロセスでもあった。「自分の人生を背景にして思考は展開される」のであり、「話とは、人生を背負ってするもの」であるのだ。

対話型鑑賞の体験を終え、2日目も小論述によって締めくくりとなった。2日間の講習を経て、先生方にはコミュニケーションの面白さ・奥深さと同時に、固定概念や思い込みの根強さも痛感していただいたようだ。「真剣に人と向き合いコミュニケーションをとるということは……頭をフル回転させたやりとりであり、体力がいる作業でもある。簡単に『コミュニケーションがとれた』と言えるものでもない、自戒をこめて考えた」とのご意見からは、先生方のコミュニケーションへ向かう真摯な姿勢が感じられた。



### 3日目

いよいよ最終日となる3日目は、京都大学総合博物館の大野照文 館長による「貝体新書 -おとなが学ぶ二枚貝-」ワークショップからスタート。ハマグリ の貝殻を観察し、グループで話し合いながら「貝柱」の本数を予測することを行った。理科教材に対象を移しながらも、大野館長が提示する理科の学びにおけるプロセス「観察・推理・確かめ」は、ACOPにおける「みる・考える・話す・聴く」とも明確にリンクするものであった。

さらに続いて「古地図を鑑賞しよう!」と題して、グループで古地図を鑑賞するワークショップを実施。ここでは、「各自が『問い』(ex: この地図はいつ作られたのだろう? など)を立て、グループで観察・推理・対話を行うことで『仮説』を作る」という作業を行い、いわばお互いでファシリテーションし合うよう

な進行となっていた。「問い」と「仮説」を全体で共有して検討することで古地図の鑑賞が深まると同時に、「どのような発問が、どのような学びを生み出すか」を考える教材開発のシミュレーションとしての意味もあるワークショップであった。

以上の内容をふまえ、「講習の内容を活かして、今後いかに学び続けていくか？」をテーマに、再び振り返りを行い、最後に小論述を経て、3日間は大団円を迎えた。以下に、講習全体を振り返った先生方のご意見から、いくつかご紹介する。

「大変、勉強になった。年度末の忙しい時期に講習を入れたことを後悔していたが、今は自分は導かれてここに来たのだ！と思わずにいられない。自分の固定概念を打ちこわすきっかけをもらうことができただからだ。(……)3日間、脳みそは最高に疲れたけど、私、まだまだ、できることある！！と前向きになれる力をもらえたと思います」

「たくさん、考えることがあり、すごい体力を使い、帰ったらドツと疲れたのですが、これが学びなんだなと思いました。いろいろな研修に参加しましたが、今回ほど、身についたと感じたことは初めてでした。本当に心が動く、感動する講習でした」

「3日前に比べて少しだけ前向きになれた。作品と向き合い、他者と向き合うには自分と向き合わねばならない。自分の思い込みや背景を認めなければスタートしない。つまり、究極コミュニケーションは他者との相互作用であると同時に、自分への問いかけ、自分を知ること、つまりは人生そのものなのだ。なんて哲学的に考え続けた3日間だった」

この3日間は、「コミュニケーション・スキルアップ」とはいえ、「マニュアル」のようなコミュニケーションの方法論を身につけるものではなかった。コミュニケーションの根底にあるものは何かと問い、各々が自分なりにそれに応えていく……その繰り返しの3日間だったのではないかと思う。「答え」を教える講習ではなく、「問い」を共有して学び始めるための3日間を経て、先生方それぞれに、また新たな問いを生み出していただけたのなら、本講座は成功であったと言えるのではないだろうか。